

キリスト教主義教育の可能性に関する研究

—コロナ禍における「キリスト教の時間」、いわゆる『チャペルの時間』の意義と効果—

前田美和子*, 加藤 美帆**, 榎崎久美子***, 田中 沙織****

(2020年12月1日 受理)

On the Possibility of the Education Based on the Principles of Christianity

—Significance and effect of “Christianity Time” under the Age of the Coronavirus Crisis—

Miwako MAEDA*, Miho KATO**, Kumiko NARAZAKI***, Saori TANAKA****

Keywords: Christian Education キリスト教主義教育, Text Mining テキストマイニング, in the Age of the Coronavirus Crisis コロナ禍, chapel hour チャペルの時間

1. はじめに

本研究は「非認知能力を育てるキリスト教主義教育の可能性について」の継続研究である。広島女学院大学で行われている「本学教育精神の中心」^{注1)}である「キリスト教の時間」は、火曜日13時から13時45分で行われており、このプログラムが開学当初より実施されてきたことは、既に「非認知能力を育てるキリスト教主義教育の可能性について(第2報)」で述べた通りである。しかし、大学開学71年を迎える今年度、COVID-19感染拡大防止のため、本学でも2020年度前期の授業は3週間の休校が強いられ、一部授業が4月第4週目より開始、全授業が5月第3週目より開始されることとなった。また、学生の登校に制限がかかり、通常の授業は基本的にオンデマンド型のオンラインで行うこととなった。「キリスト教の時間」もまた、当初計画していた4月14日の初回からは開催することができなかった。

そこで本稿では、例年の「キリスト教の時間」に対するコメントの傾向と今年度の傾向を比較することで、コロナ禍における「キリスト教の時間」の提供方法や提供内容の変化が、学生に与えた影響について検討する。

2. 2020年度前期の「キリスト教の時間」の概要

2020年度前期の「キリスト教の時間」の実施について

* 広島女学院大学人文学部・人間生活学部共通教育部門准教授

** 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科准教授

*** 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授

**** 九州産業大学人間科学部子ども教育学科准教授

て、「キリスト教の時間」の運営を行っている宗教センターに保管されている資料によると、4月8日に行われた宗教センタースタッフらによって行われるミーティングにおいて、「感染症対策に基づく『キリスト教の時間』運用について(案)」で三密を避けた形で行う方向性の「短縮版」、「ビデオ視聴(教室あり)」、「ビデオ視聴(教室なし)」の3つの案が示され、実施方法について話し合われ始めたことが記載されている。

通常「キリスト教の時間」は、砂本記念講堂において「前奏」「賛美歌」「祈祷」「聖書朗読・報告・講師紹介」「講演」「後奏」で構成される。3つの案のうち、「短縮版」は場所そのまま「賛美歌」と「講師紹介」を除いた「前奏」「聖書朗読・祈祷」「講演」「後奏」から構成され、後日参加できなかった人のために動画を配信するというものである。次に「ビデオ視聴(教室あり)」は、撮影を講堂またはチャペルで行い、録画したものを大学の教室で視聴できるようにし、「同時配信および後日配信」を行うものである。またその内容は「短縮版」よりさらに縮小され、「聖書朗読・祈祷」「講演」のみの約22分のプログラムである。3つ目の「ビデオ視聴(教室なし)」は、プログラムは「ビデオ視聴(教室あり)」と同様の内容であるが、教室での視聴を行わず、動画を「同日配信および後日配信」としたものである。このミーティングを経、4月8日には宗教委員会^{注2)}で、「キリスト教の時間」について議題があがった。

4月10日に湊晶子広島女学院大学学長により、4月20日からの対面式授業は開始すべきではないとの方針が示

されたため、宗教センタースタッフらによって運営方法が再検討され、「ビデオ視聴（教室なし）」で行うこととなり、4月21日から本学のポータルサイトを介し、実施することとなった。その際、「キリスト教の時間」の動画を2週間の期間に限り学内関係者のみが閲覧できるように設定した限定公開を行うことにした。このことにより、全ての授業が遠隔となり、一堂に会することができない状況にあっても、全学の学生及び教職員が「キリスト教の時間」に参加できるようにした。また、ポータルサイトで配信の際にはGoogle フォームを利用したチャペルカード（出席カード）の提出を求めた。Google フォームでは本学学生、教職員のみがコメントできるように設定され、学生番号、氏名、感想の記入を求めた。これまでは紙媒体の資料に講師紹介や前回のコメントを学科ごとに掲載して配布していたが、2020年度前期はGoogle フォームによって集められた感想をまとめたHPが作成され、回ごとの感想を踏まえての大学宗教委員長のコメントと、学生コメントの公開を行っている。掲載学科ならびに配列順は国際英語学科、日本文化学科、国際教養学科、生活デザイン学科及び生活デザイン・建築学科、管理栄養学科、児童教育学科及び幼児教育心理学科であり、配信週の週末から次週月曜をめぐりに取りまとめられたものを掲載し、次の配信までのコメント記入を促している。「キリスト教の時間」の構成は、表1にまとめた通りであり、各回で多少違いがある^{注3)}。

このように、昨年度までの砂朶記念講堂で行われていた形式とはかなりの変化を余儀なくされた「キリスト教の時間」であるが、宗教センタースタッフらの尽力により、この伝統的な学内行事を継続し続けている点は特筆すべき点であると言える。また、これまで行われてきた聴覚障がいのある学生に対する字幕提供についても、配信動画でも同様に行われたこと、また、配信日当日だけでなく、2週間配信し続けることで、学生や教職員が「キリスト教の時間」に2019年度以前と同様に気負いなくアクセスできる配慮が継続的に行われ、かつ工夫されている点も今年度の大きな特徴である。

2週間の公開期間はもとも、PC 機器やインターネットによる視聴に慣れない学生や教職員に配慮したものであった。しかし、配信期間中には何度でも見直すことができ、当時未曾有の事態に生活の急激な変化が余儀なくされ、精神的に不安定になったり、戸惑いを感じたりした学生もいる中で、本学の「本学教育精神の中心」と位置づけ、大学開学以来継続してきた教育プログラムを通して、学生らは本学の建学の精神に基づいた普遍的なメッセージを受け取ることができたと考えられる。ま

表 1 2020年度キリスト教の時間の構成（配信データから著者作成）

	第1回 (4/21)	第2回 (4/28)	第3回 (5/12)	第4回 (5/19)	第5回 (5/26)	第6回 (6/2)	第7回 (6/9)	第8回 (6/16)	第9回 (6/23)	第10回 (6/30)	第11回 (7/7)	第12回 (7/14)	第13回 (7/21)	第14回 (7/28)
前奏	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
賛美歌														
祈祷	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)	×	○	○(最後)	○(最後)	○(最後)	○(最後)
聖書朗読									○(字幕で表示)	○	○(字幕で表示)	○	○	○
大学宗教委員長 による講師紹介	本人	本人	本人	本人	本人	○	○	○	○	○	○	○	○	本人
講演	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
後奏	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○
備考						チャペルで収録、 学外講師スタート	前奏と後奏に 聖歌隊による校歌	前奏と後奏は左 記に同じ、縦編 が3日後に配信	前奏と後奏は 左記に同じ				前奏と後奏に 聖歌隊による 校歌	前奏と後奏は 左記に同じ

た、「キリスト教の時間」は本学で行われる授業に先駆けて全学の学生に配信されたことから、入学式やオリエンテーション1日しか来学できなかった学生たちにとっては、大学から発信される数少ない学びと大学とのつながりを感じるこのことのできる機会であったと考えられる。よって、この仮説を検証するため、本研究では2020年度前期の出席率とコメントの検討を行った。

3. 2020年度の「キリスト教の時間」出席率について
前項に記したように、オンライン配信となった「キリスト教の時間」であるが、実際に学生たちの参加はどのようであったのだろうか。これまでの研究では、「キリスト教の時間」参加後にチャペルカードを使用して出席率とコメント率をまとめてきたが、2020年度においてはGoogleフォームによるコメントの提出が出席とみなされることとなった。よって、ここに何か変化があったのではないかと考え、学部改組のあった2018年度、2019年度

2018年度前期出席率の推移

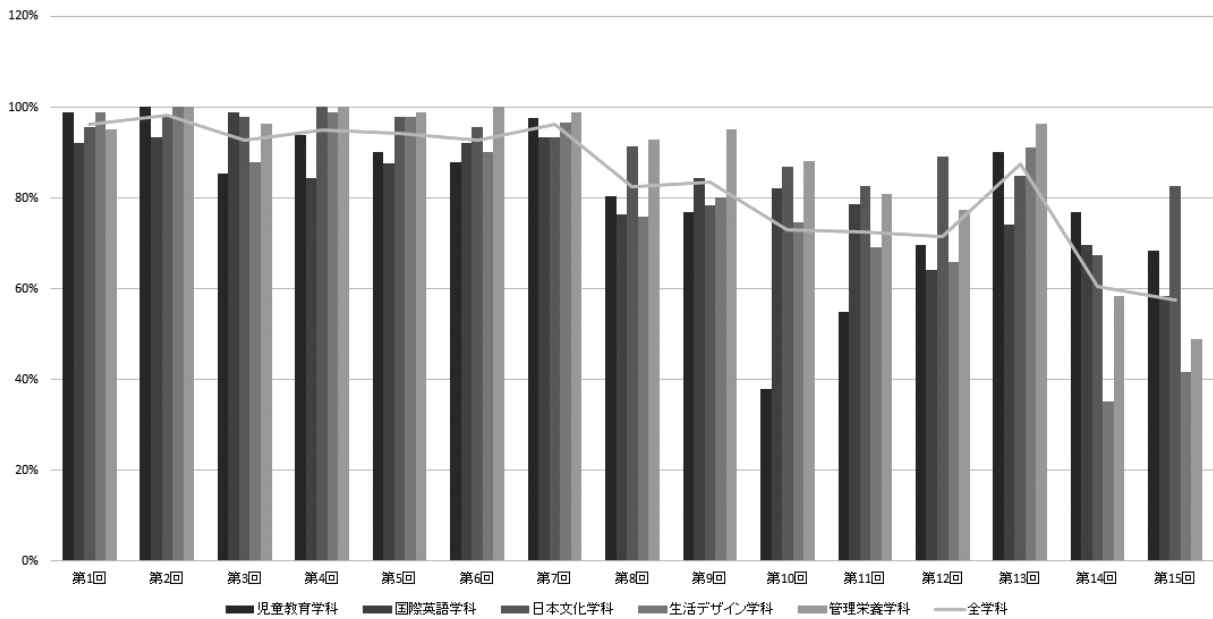


図1 2018年度前期の1年生の出席率の推移 (調査データから著者作成)

2019年度前期出席率の推移

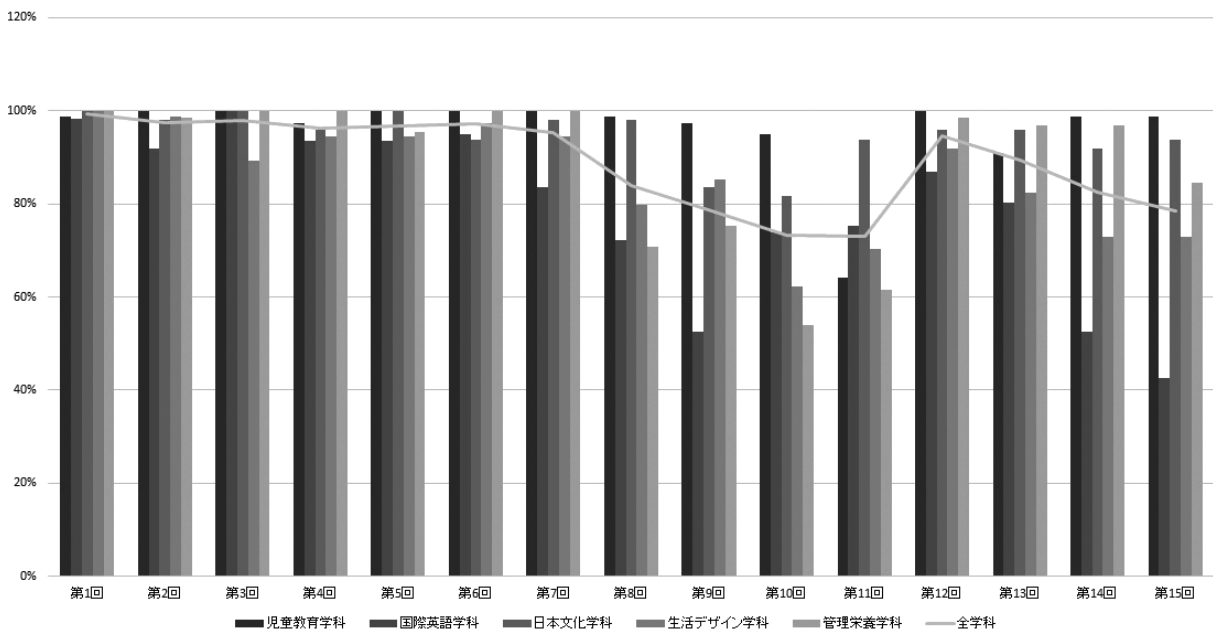


図2 2019年度前期の1年生の出席率の推移 (調査データから著者作成)

2020年度前期出席率の推移

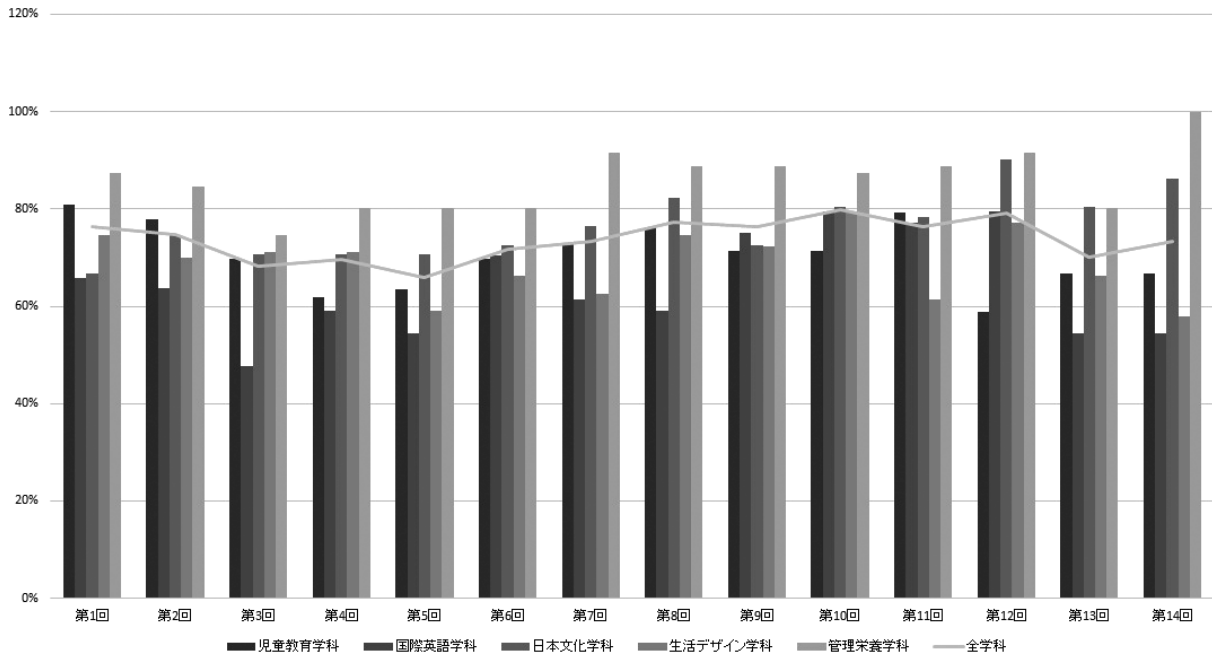


図3 2020年度前期の1年生の出席率の推移(調査データから著者作成)

の前期の1年生の出席率の推移と2020年度の1年生の出席(コメント)率の推移を確認した(図1, 2, 3)。

これまでの研究でも提示してきたが, 対面形式で行われていた従来の「キリスト教の時間」では第8回, 第9回のあたりからやや出席率が低下する傾向がみられていた。例えば, 国際英語学科や生活デザイン学科は顕著に回を追うごとに出席率が低下している。宗教委員会でもこの出席率の低下については議題に上がり, 学科の宗教委員からの声かけや「キリスト教入門」という科目との連携を図るなどして学生たちに働きかけを行ってきた。

しかし, 2020年度はおおよそ出席率が横ばいであった。これについては, 次のように考えられる。今年度においては, 学生によっては授業の一環であるという認識で参加し続けたのではないだろうか。もちろん, 「キリスト教入門」との連動はこれまでも学生に伝えられていたがよりその意識が学生に浸透したのではないかと考える。このことは, 後期の対面授業になったことによる出席(コメント)率との比較においてさらに考察できることであろう。しかし, 高い出席率と多彩で真摯なコメント内容から鑑みるに, コロナ禍において「キリスト教の時間」が入学間もない1年生にとってこれまで以上に本学のキリスト教主義教育の一端に触れる意義深い時間となったと考えられる。

4. チャペルカードのテキスト分析について

次に, テキストマイニングの結果について述べる。最

終回である第14回のコメント^{注4)}について, これまで同様最低限のデータクリーニングを行い, KH Corder 3 を使用し, テキストマイニングによる分析を行った。特殊な状況下での学びを余儀なくされている学生たちがどのようなことを考えたのか, ということについても明らかにすることを目的とした。

その結果, 21,810語(異なり語数は1,500語)が抽出され, このうち7,429語(異なり語数は1,175語)が分析に使用された。このうち, 頻出150語を表2に示した。

頻出150語において出現回数が100回を超えている語は, 「思う」「キリスト教の時間」「学ぶ」「自分」「お話」「知る」「考える」「時間」「たくさん」の9語であった。今回, 2位に「キリスト教の時間」が入っているのは, 最終回である14回が「前期を振り返って」というタイトルのもと, 「キリスト教の時間」全体を振り返る内容であったことによるものと思われる。これら上位語についてみると, 全体的な傾向は, これまでの対面で実施されてきた「キリスト教の時間」における手書きコメントの場合とほぼ同様で, 著しく傾向が異なるような点は見られなかった。これまで同様「思う」の出現回数が最も多く, また, 「学ぶ」「知る」「考える」といった語の出現回数も100回を超えていたことから, 対面時同様に, それぞれが, 各回の講師の講話をしっかりと受け止め, 思い, 考え, 全回を通じて, 様々なことを知り, 学んできたことがうかがえた。最も出現回数の多かった「思う」について関連語検索を行った結果, 第1位の関連語は「自分」

表2 頻出150語

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	思う	304	51	学べる	20	96	入学	11
2	「キリスト教の時間」	206	51	考え	20	96	物事	11
3	学ぶ	141	51	持つ	20	96	平和	11
4	自分	140	51	色々	20	96	変える	11
5	お話	132	51	本当に	20	96	毎回	11
6	知る	123	56	ありがとう	19	106	意見	10
7	考える	113	56	学校	19	106	楽しみ	10
8	時間	109	56	言葉	19	106	月	10
9	たくさん	100	56	最初	19	106	向ける	10
10	聞く	99	56	深い	19	106	思い	10
11	今	95	61	一番	18	106	視聴	10
12	キリスト教	92	61	自身	18	106	人間	10
13	授業	87	61	前	18	106	聖書	10
14	考え方	82	64	頑張る	17	106	他	10
15	大切	71	64	視点	17	106	被爆	10
16	感じる	65	64	少し	17	106	普段	10
16	振り返る	65	64	内容	17	106	歴史	10
16	話	65	64	忘れる	17	118	「いのちの教室」	9
19	人	63	64	問題	17	118	学習	9
20	講師	62	70	回	16	118	嬉しい	9
21	残る	51	70	戦争	16	118	興味	9
22	出来る	49	70	分かる	16	118	思い出す	9
23	心	44	70	勉強	16	118	思える	9
24	様々	37	74	いろいろ	15	118	視野	9
25	改めて	36	74	コロナ	15	118	実際	9
25	世界	36	74	強い	15	118	終わる	9
27	学期	34	77	気持ち	14	118	触れる	9
27	良い	34	77	経験	14	118	身近	9
29	貴重	33	77	新しい	14	118	聴く	9
29	原爆	33	77	生活	14	118	直接	9
29	生きる	33	77	体験	14	118	日本	9
32	見る	32	77	不安	14	132	活動	8
32	後期	32	83	楽しむ	13	132	驚く	8
34	前期	31	83	共に	13	132	形	8
35	機会	30	83	教える	13	132	見える	8
35	人生	30	83	成長	13	132	見つめる	8
35	方々	30	83	知れる	13	132	講演	8
38	今回	28	83	目	13	132	事実	8
39	命	27	89	オンライン	12	132	実感	8
40	印象	26	89	感謝	12	132	書く	8
40	多く	26	89	行動	12	132	信じる	8
42	動物	24	89	初め	12	132	大事	8
43	多い	23	89	初めて	12	132	部分	8
44	違う	22	89	素敵	12	144	Ko 講師	7
44	先生	22	89	特に	12	144	Ya 講師	7
44	大学	22	96	過ごす	11	144	ゲーンズ先生	7
44	動画	22	96	犬	11	144	意味	7
44	聞ける	22	96	殺る	11	144	外部	7
49	受ける	21	96	処分	11	144	楽しい	7
49	変わる	21	96	知識	11	144	広島女学院大学	7

であり、本学「キリスト教の時間」に関するこれまでの研究における報告同様、この時間が、学生たちにとって、「自分」について思いを致す時間となっていることを示すものであり、オンラインでの配信となっても、「キリスト教の時間」の本質は損なわれていないことが示されたと言える。さらに、学生が自分について思いを致した内容について詳しく検討するため、「思う」と「自分」の関連語について共起ネットワークを描いたものが図4である。「思う」と「自分」の関連語の第1位は、「考え方」であった。KWCI コンコーダンスの結果も踏まえると、「キリスト教の時間」の中で新たな考え方に触れ、自分の視野が広がったと感じていることがうかがえる。

頻出150語のうち今回に特徴的な語としては、74位の「コロナ」（新型コロナウイルス感染症<COVID-19>を指す語）や、89位の「オンライン」があげられる。社会に深刻な影響を与えている感染症の問題について、学生が「キリスト教の時間」を通じた学びの中でどのようなことを考えたのかを探索的に検討するため、「コロナ」の関連語について共起ネットワークを描いたものが図5である。この共起ネットワーク図からは、自身の学校生活への影響を痛感しつつ、今この時や人の大切さを実感す

るとともに、戦争や原爆といった過去の社会危機にも思いを馳せていることがうかがえる。そして、共生について改めて考えたり、他者との交流できることのありがたさを知る契機となったり、一部にはコロナ禍を乗り越えるヒントを得た可能性などもうかがえた。

次に、各学科に共通する傾向や学科独自の特徴等について明らかにするため、学科ごとの特徴語を抽出した。その結果を表3に示した。思い、考えたことについて振り返った学科もあれば、学びを得たことについて振り返った学科もあり、振り返り方には学科による違いも見られた。KWCI コンコーダンスの結果も踏まえると、「キリスト教の時間」という名称に当初抵抗を感じていた者も、それが布教を目的とした宗教プログラムではないことに気づくことで、総じて、多様な講師からもたらされた現代社会の向き合うべき課題に目を開かれ、聖書やキリスト教に流れる隣人愛の精神を入り口としながらも、それぞれに共生や協働、寛容の精神、自己の確立など本学のディプロマポリシーで掲げている価値についての様々な学びや気付きを得ていることがうかがえた。そして、そのような学びを得られたことに対する感謝の念を記そうとした学科もあれば、各自が目を開かれた内容に

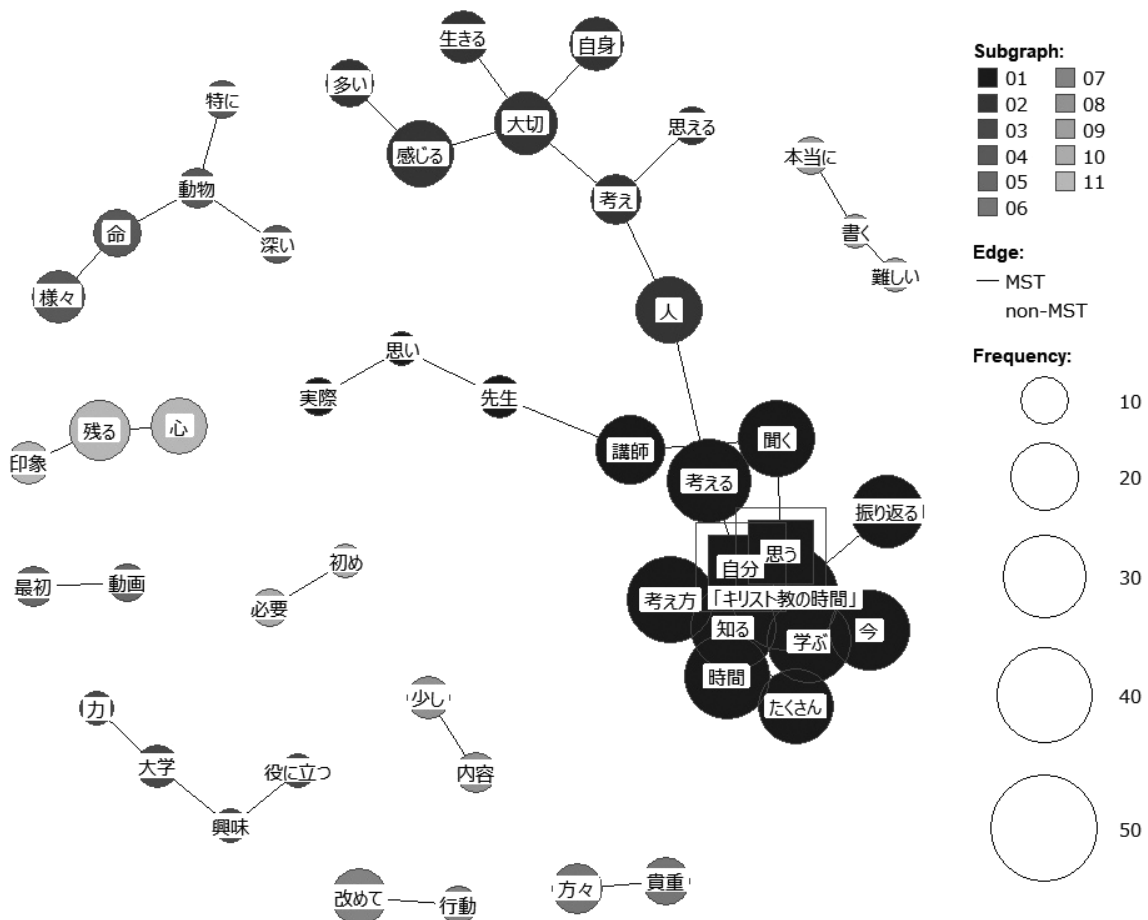


図4 「思う」「自分」についての関連語の共起ネットワーク

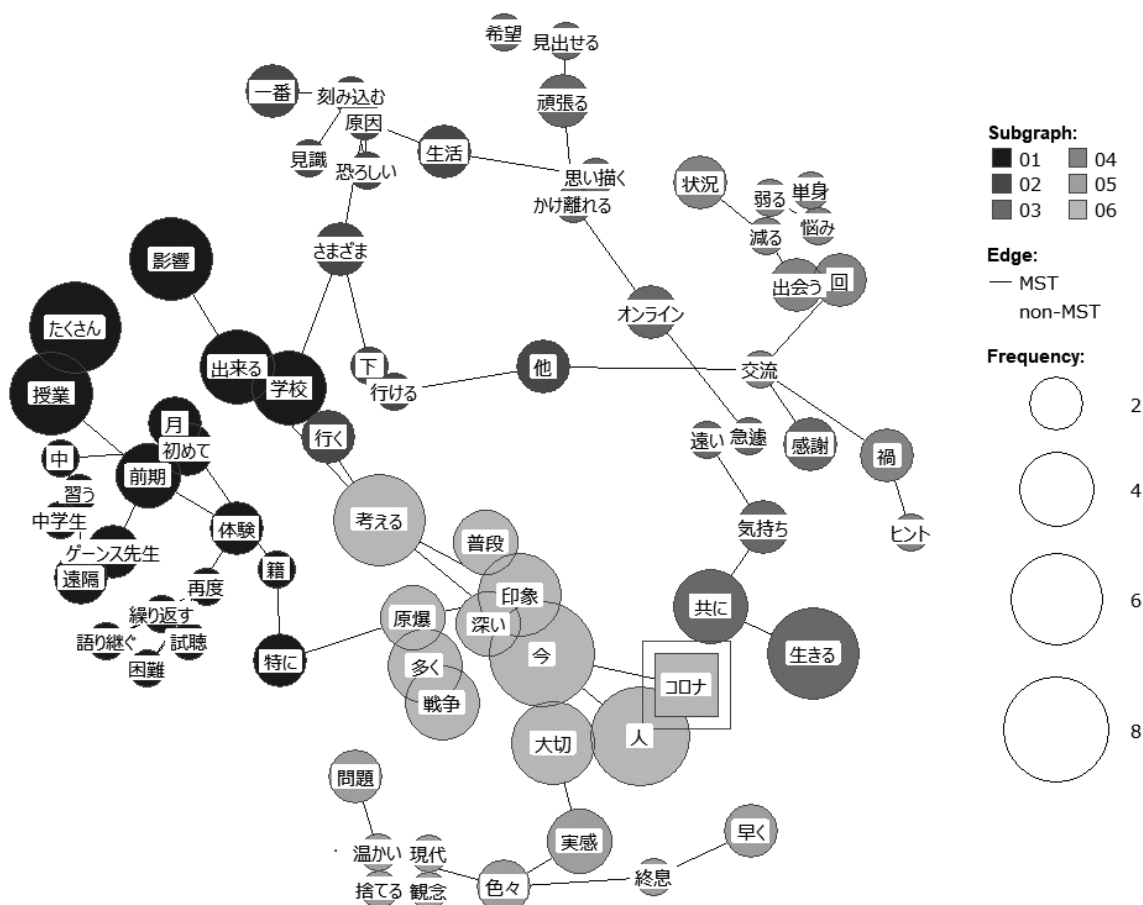


図5 「コロナ」についての関連語の共起ネットワーク

表3 学科ごとの特徴語

国際英語学科	日本文化学科	生活デザイン学科	管理栄養学科	児童教育学科
多く .154	講師 .240	改めて .153	思う .306	学ぶ .191
聞ける .128	時間 .233	聞く .148	「キリスト教の時間」.264	キリスト教 .177
キリスト教 .125	自分 .213	授業 .133	たくさん .250	感じる .175
勉強 .118	考える .212	出来る .127	自分 .244	たくさん .173
動画 .114	思う .202	良い .127	知る .236	「キリスト教の時間」.171
方々 .111	聞く .200	大学 .117	お話 .227	今 .140
忘れる .111	話 .189	貴重 .113	考える .225	人 .138
学ぶ .104	「キリスト教の時間」.184	生きる .101	振り返る .222	後期 .136
視野 .103	大切 .179	学期 .100	聞く .215	ありがとう .130
「キリスト教の時間」.102	貴重 .172	聖書 .094	学ぶ .214	出来る .119

ついて記そうとした学科もあったと言える。

5. おわりに

大学開学から71年目にして、はじめて、「キリスト教の時間」を遠隔で実施することになった。筆者らの共同研究も、今回はコロナ禍において思うように進めることができず、新たな在り方の模索を余儀なくされた。しかし、こういった状況であるからこそ、この研究を継続する意味があるという強い共通理解から、最終回である第

14回のコメントのみ取り上げ分析をすることで合意した。

学生、教職員が一堂に会して「キリスト教の時間」を共に過ごすのではなく、事前に収録された動画をそれぞれのタイミングや場で視聴する初めてのスタイルとなり、この他、これまでの「キリスト教の時間」とは様々な点で形式が異なることも本論で示した通りである。しかし、そのような中でも学生たちのコメントからは、「キリスト教の時間」を通して本学の学生たちが変わらず従前の「キリスト教の時間」の学びを保証できた様子が見え

かがえた。

このオンラインでの開催によって、今年度入学の1年生は、例年のように講堂で「キリスト教の時間」を過ごすことができず、一堂に会することで感じられる空気感や隣人を強く意識することができる環境というものは、経験できなかったのかもしれない。しかし、高い出席率が示すように、オンラインでの開催がキリスト教主義教育へ触れる機会を奪ったということは決してない。さらに学生のコメントからは、むしろ一人ひとりが自分自身と向き合い、様々な場所や時間に建学の精神ならびにキリスト教の精神に基づいた教育観や人間観に触れることができ、学びを深められたことが確認できる。

これまで長く対面により実施されたきた「キリスト教の時間」の学びの中には、対面で実施してこそ教育効果が期待できるものも含まれているため、その全てをオンラインで再現することができるわけではないが、本研究の結果からは、その学びの主要な部分については、オンラインでも保証できたといえるのではないだろうか。このことはこのコロナ禍において大変有意義なことであったと考える。

対面で一堂に会し、歌声を合わせ、講師の熱い思いを肌で感じることで得られる経験は何ものにも代えがたい機会であるが、オンラインにもまた、オンラインならではのメリットやデメリットが存在する。今後これを機に世の中の在りようも変化していくであろうことを踏まえ、対面でしか得られない教育効果を精査するととも

に、オンラインにおける「キリスト教の時間」のさらなる充実と可能性について、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

注

- 1) 『広島女学院 大学要覧』, 広島女学院大学, 1960年4月
- 2) 宗教委員会とは、大学宗教委員長によって招集され、大学長、各学科ならびに共通教育部門から1名ずつ選出された宗教委員、宗教センター事務課3名(注2)によって構成されている委員会で、概ね毎月1回会議が行われている。
- 3) 構成の違いについては、主には全体の時間の調整のため、また講師のお話しの長さが関係していると考えられる。おそらく慣れない環境の中で長時間の動画視聴は学生の負担になるという配慮であると想像される。
- 4) 前期「キリスト教の時間」最終回の内容は毎年、「前期を振り返って」と題され、大学宗教委員長による講話で前期の「キリスト教の時間」の内容を振り返るものである。コメントデータや配信動画データについては今年度も宗教センターにお願いしたところ、快くご提供頂いた。また、この論文の執筆にあたって澤村大学宗教委員長に多大なご協力を頂いた。深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 前田ら「非認知能力を育てるキリスト教主義教育の可能性について(第2報)」『広島女学院大学幼児教育心理学研究紀要(4)』, 広島女学院大学, 2018年3月